めたにも拘らず、世情急変のため意の如くならず、次第に経営は行詰り、二十八年遂に閉鎖の已むなきに立至った。

その後ながく失意の時が続いたが、数年前から大阪山本楽器店の輸入業務を委嘱されたので、元気に大阪へ通勤を続けた。

故人は頭脳明晰、殊に文筆に長じた。負けず嫌いで、正義観が強く、自他共に曲った事を許さない厳しさは立派であった。その反面仲々優しい所があった。

故人は趣味の広い人であった。剣道は三段格、弓道二段、乗馬、水泳などスポーツをよくした。刀剣に凝り、立派な鑑識眼をそなえ自らも何振りかの名刀を所蔵した。

書道、俳句、漢詩を好むなど、古武士を思わせる風格があった。有馬の奥の三田藩九鬼家々老職をつとめた家柄がそうさせたのであろう。

そうかと思うと、新しいものが好きであり、長い海外生活の習慣で、服装など身だしなみにはなかなかやかましかった。又洋画をよくし、風景、静物、船舶など写実的な絵を器用に画きこなし、素人離れした多くの作品をのこしている。

恵まれた五男一女は、皆立派に成人して家庭を持ち、八人の孫が出来ている。

長男　重平　神戸高商　名古屋精糖
次男　次夫　高等商船　ジャパンライン
長女　明子　読売新聞社　朝野祐作夫氏人
三男　哲夫　高等商船　三菱造船
四男　和夫　〃　商船三井
五男　五郎　神戸大学　日商岩井

このうち唯一人次男の次夫君が、去る四十四年一等機関士として乗組んでいた「ぱりばあ丸」の野島崎遭難に際し、殉職したのは思ひもよらぬ悲しい出来事であった。流石に気丈な故人も非常に落胆していたのは真に気の毒であった。

布引に新幹線の新神戸駅が出来るので、附近の道路が拡張されることになった。熊内町二丁目の住居が拡張路線に当ったので立退きを命ぜられた。換地の交渉に随分手間取ったが、漸やくもとの土地を幾分ずらせて交付されることに決ったので、昨年末、布引中学正門前の仮設住宅へ一時立退いた。旧居が撤去され、整地された新しい土地に、新居建築着工の地鎮祭を行なったのは、死の直前の二月末であった。

六月には新居に入れるから、その時は是非泊りがけで遊びに来て呉れと、あんなに新居の落成を楽しみにしていたのに、その日を待たずして急逝したのは、無心残りであったろう。

布引の仮寓に長男の重平君一家と共に住んでいる澄子未亡人は健在で、八月中旬新居が落成すれば、挙って移り住む事になっている。

長光院武誉寿岳居士のご冥福を心から祈りつつ擱筆する。合掌。

焼酎王の借金証文

松丸の某家が家宝として保管

名誉市民　大宮庫吉氏逝く

宿痾の脳軟化症のため去月二十一日、多彩な八十五年の生涯を京都市左京区福地町の豪邸で閉じた宇和島の名誉市民、大宮庫吉翁（宝酒造取締役会長）の葬儀は二十七日社葬をもって盛大に執り行なわれたが、これでまた一つ宇和島の自慢のタネが消えたことになる。

大宮氏は明治十九年四月に宇和島市竪新町井上宇平の三男に生まれ、丸穂のお米屋大宮氏の養子となったが、明治四十一年三月、二十二才の時、一代の女傑鈴木ヨネの日本酒類宇和島工場に倉男として入社、焼酎ミリンの醸造技術を習得して大正五年伏見の四方合名会社に入社したのが出世コースに乗るきっかけとなった。

実直で努力家で、経営の才にも非凡なものを見せて次第に頭角を現わした大宮氏は、やがて宝酒造と改称された同社の重役陣に抜擢され、更に社長となって実権を掌握し、ついに同社をして日本一の焼酎メーカーに育て上げるほか、数多くの系列会社を傘下に一大コンツェルンの結成に成功したのであった。

それを俄かに無配会社に転落したのは、タカラビールの醸造に手を伸ばして失敗したためで、当時大蔵省の主税局長だった塩崎潤代議士の斡旋によってビール部をキリンビールに譲渡してやっと活路を開いたことは、読者の記憶にもまだ生々しい筈である。

以後、ビールで受けた大きな傷痕のため無配状態が続き、株価も含み資産に支えられて辛うじて七十円台を維持するという不振の日が、いまも続いているが、これを苦にして死ぬまで社業を養子の隆社長に委せ切れず陣頭指揮を取って来たあたり、この傑物の悲劇性がある。常に氷の如く冷静で、石橋を叩いて渡る関西流の前垂れ商法に徹して大成したこの異色の成功者は、愛郷心が頗る熾烈で、宇和島市公会堂の建設資金に二千五百万円を、また自身の銅像の建てられてある和霊神社公園の噴水施設費に二百五十万円を寄付している。

―近畿放送、桃山城観光、比叡山観光、日本観光ゴルフ、京都観光センターその他多くの地元企業に出資して重役に推され、多くの経済団体の役員として振幅の大きい活躍を続け、紺綬褒章（八四）藍綬褒章を授けられ、勲三等瑞宝章を受けるなど、近畿を代表する大実業家として名声高いものがあったが、この人にしてただ一つ意の如くならなかったのは、松丸の某家に保管される一金百五十円の借用証書であった。

これは大宮氏が日本酒類宇和島工場の倉男時代、北陽花街（川端と呼んだ時代）の美妓と灼烈の恋に落ちて、払った前借金がこの百五十円だったのである。間もなく大宮青年は京都伏見の四方合名に移って出世コースに乗ったが、身請けの金を融通した松丸の某家では、時効になった後もその証文を家宝として保管して今日に及んでいるというから、このたびの大宮

氏の死で、また新しい話題となっていることであろう。

聡明貞潔で鳴る現夫人の前身こそ、大宮青年の大きな愛の手で苦界から脱した女性であり、謹直無比な故人にとっても生涯に一度、パッと咲かした大ロマンの花というべく、心から睦み合った六十年の夫婦愛と人間形成は、筆舌に尽し難い馥郁たる人間ドラマといえよう。

父母の思出

平高弥之助

父が鈴木商店に入社した頃は店は栄町三丁目北側に在り御本家は同じ栄町四丁目北側の古風な構えであった。私は当時東川崎町に在った社宅に居住し三才であったが母によく連れられて御本家へ行き御家様や岩治郎様夫人の御手伝をしている間御孫様の千代子様や政江様に遊ばせて頂いた事が眼に浮んで来て懐しく感じています。母の政子は御家様と御寮人様にとても気に入られていた様であった。父は田宮様などと共に九州大里に行っていたが父二十八才の時金子様柳田様の推挙の下に満州支那に支店開設の為に赴いたのであるが大連から奉天へそれより北京に赴き時の清朝の政府大官連中と会談の上、支店開設の許可を得て天津上海広東と赴いた様である清国政府大官と記念撮影したのを見たものだがそれも今も思い出の物となったのである。父はそれより台湾に渡り安平港に上陸して台南に赴き領台後の台湾に於て仕事をすべく金子、柳田両先輩に願い許可を得て台湾駐在員となり先づ台湾の根拠地として台南に店を開いたのである。明治四十二年小生は八才であったが神戸脇之浜の家を後に同年十二月に台南に母と共に赴いたのである。店に厳添寿と云う十六才の台湾人が居て良く遊んで貰ったものであったがその後彼は第二大戦終戦後台湾随一の金満家林本源を凌ぐ富豪になり今は二代目が継いでいるそうである。

小生は母が病を得た為明治四十四年末坂本万吉氏と女中お松が付添い神戸へ引揚げ須磨の保養院に入院し此処に於いて介抱の甲斐もなく母は息を引き取った。その前母は死期を悟ったものかお松に風呂を沸かさせ小生と入浴を共にしたのであるが湯上り後平常通りに食事も共にしてから床に就いたから小生には母は全快したものと思い込んでおったが俄然夜中午前二時頃女中に起され病の変ったことを知らされ病棟の方へ連れて行かれた。母は寝床から起きあがり小生を抱えて、祖父母や皆の云うこと聞いて立派に成人するようにと悟された。暫らく抱いていたが重いから下りてと云って横になり午前四時には早この世の人ではなかったのである。享年二十八才であった。生前死の覚悟が出来ていたのか葬儀一切の持ものまで揃えていたほど万事に心に豊かさがあったことが今も涙の種である。話は父に帰りますが、その頃父は台南より台北の方へ台湾の本拠を遷していたが大正八年引揚げる迄の間に小生は父の元へ渡った事がある。父が手掛けた会社、台湾炭業台湾拓殖、台湾倉庫、台湾塩業、東洋製糖等で台湾実業界では活躍していた様である。

父が引揚げた後小生は大正十五年台湾嘉義郡南靖庄に在った東洋製糖本社に赴任していた。当時の社長は山成喬六氏であり常務二人は入来重彦氏と大賀基作氏と云う方であり大変お世話になったことを感謝している。

その間小生の一番記憶に残るのは明治四十二年清国の孫文氏が日本亡命を希望し、時の右翼の元締たる頭山満翁に依頼され、翁は早速時の政府に交渉せしも予備金なしと断られ、次に三井三菱へ交渉、せしも重役会審議の上ならでは如何とも出来ぬとはねられ時日接迫の為鈴木商店に交渉を持って来た。金子翁は同郷で当時大使館参事官たりし吉田茂氏に白羽の矢を立ててこの依頼を受けるに至ったが翁は多忙ではあり部下の平高に一任する方早からんと云われたので吉田氏自ら台湾に乗り出して来られた。父は金子翁に早速承諾を促したが関係事業の金融輻輳の為一先ずこの際平高個人にて台銀より借入れて十七万円吉田氏に渡すようと申された。その結果孫文の亡命が叶った。而して確か塩屋方面に孫文を住わせて革命の為の帰国する迄面倒を見たのである。尚吉田氏もその後之に依って名声上り公使から大使と栄達のコースを邁進されたのであった。父と母の思い出は尽きぬが今回は之にて秃筆をおく。終りに辰巳会の皆様の御健康を祝福して止まない而々。

（筆者は平高憲太郎氏長男）

白石求馬さんの面影

柳田　義一

白石さんを識ったのは、去る大正七年僕が鈴木商店入社の頃からである。当時白石さんは、先代冨士松の竹馬の友、中村平三郎翁の経営にかかる中村内外交渉事務所の社員として鈴木商店へ絶えず御出入りになり、土地建物等の登記の仕事の委嘱を享けて、僕の勤務していた会計部にも屡々足を運ばれた。

からだの引締った背は高からず細い眼に銀縁の強度の眼鏡、地味な紺の背広に稍々深い目に被った中折帽の清潔な白面の万年青年と云う感じで晩年迄続いた。

白石さんは若い頃から中村翁の薫陶一筋に生き、あらゆる苦難にも屈せず十年一日の如く活動力の実に旺盛な生涯であった事に僕は敬服の辞を吝まない。

去る昭和二年財界パニックの余波は不幸にも僕達の鈴木商店にも及んだ。破綻後の整理に当っては、白石さんは金子直吉翁の最も信頼さるるところとなり、日夜膝つき合わせ後仕末に全力を捧げられた。

引続き之等鈴木整理に依って台湾銀行が設立した蓬萊不動産株式会社に金子翁の命ぜらるるままに入り、充分なる成果を揚げられた、其の当時の蓬萊不動産の幹部達は異口同音、白石さんの敏腕に驚嘆のことばを発したと僕は聞いている。